シ、聽カズシテ乃チ之ヲ公衆ニ暴ハシ或ヒハ胴上ゲ策トナリ或ハ蒲團蒸シ政略トナル。其爲ス所一モ因循苟且ノ點ナシ。事較々暴ニ近シト雖ヒ、之ヲ彼ノ汚穢場裡ノ亂書ニ比セバ豈ニ公明正大ノ所行ト謂ハザルヲ得ンヤ。故ニ當今ノ世ニ際シテハ朋友ニ數バスルヲ憂ヘズ、忠告セザルヲ憂フ。不可ナレバ則チ止ムヲ憂ヘズ、善導スルナキヲ憂フ。是亦時世ノ變、場處ノ差自カラ然ラザルヲ得ザルナリ。嗟乎世益マス文明ニ赴キテ人益マス浮薄ニ流レ、學術日ニ進ミテ友情日ニ冷淡トナリ、損友ニ近ヅキ、益友ヲ遠ザケ、祝駝ガ佞ヲ才ト爲シ、宋朝ノ美ヲ德トナシ、遂ニ彼ノ蘇峯生ヲシテ明治ノ世界ハ批評ノ世界ナリ、冷笑ノ社會ナリトマデ絕叫セシム。是レ誰ノ罪ゾ、之ヲ匡正スルハ抑モ亦誰ノ任ゾ。

春季休業紀行

水月仲丸

始なく。終なく。遂なく。際なく。假令ひ如何なる數理家が幾億万人汗を流して數ふるも。過去の過去其又過去の又過去と推すとても。未だ始を發見しさる人もなく。未來の未來其又未來の又未來と及ぼすとても。遂に其終を見出したる者なき時間なれば。昨日の廿四時間は短くて。今日の一晝夜は長しとの念を起さと。朝三暮四の笑を免れざるも。此三月の末日は。何故に例月の末日よりも長く思はるるや。早く春季休業來まがし。さても來らん其時と。名に背きたる白川の。濁をる流を遡り。幽邃蕭條たる窄谷を蹈み。熾々たる黑烟を以て呼吸する。阿蘇噴火口を探驗せんも

のと。友を約して待つる間に。余は俄に飛信を得たり。是余が父を亡てより。第二の父と頼める伯父より。余の歸省を促ぎ來れるなり。是に於て。余と前約を解き。四月一日前十時池田より瀛車に乘たり。

西南役の舊戰地なる植木高瀬を過きつゝ。彼處に見るは紡績會社なり。其處に見るは礦山局なり。知ぬ是此地や廿年以前には。片舟繫在蘆荻灣と云へき處なりしも。三池炭坑開々し以來。頓に一變ぎたる小都會の大牟田を過ぎ。渡瀬に夢に入まて田代に覺めぬ。大岩石に躓て顛をんと欲する老松を天拜山上に見ては。菅公れ往事を追懷し。巍然たる寶滿山を望みては。小野湖山が雄峻中含温雅氣。居然坐受衆山朝の句を味ひたり。博多にて下乘し。小山君よ會し。同行を得て。長き福岡も短く過ぎぬ。愛岩山姪濱。白砂青松の壹岐松原。山水明媚の長垂山麓を巡徊して。周船寺村に達すれば。小田君は早や嬉し氣に彼家よ歸りぬ。余も間もなく字志登に着きぬ。

伯父様御機嫌能と挨拶する其下にも。伯父の手を以て煙管を探り玉ふを見ては。猶ほ眼病の癒ざるを思ひ。嬉しき顏にも涙を浮べぬ。爰よ再宿したる事なれば。伯父を辭ぎて我故鄕雷山村に急ぎぬ。今余と門の國を踰へたり。天眞爛熳たる弟姪等と余を圍ぎて入まぬ。母と兄は余顏を見玉ふや。曰く。未だ胃病は癒ざるか頗る菜色ありと。慈愛滴る此言は。父母唯其病之憂の謂を余に感せしめたり。余は先つ家を見廻しぬ。足の裏には大なる豆の出來たる爲め歩ミ難かりし前の苦を忘まぬ。

嘗て余が父。假山水を築んと志ずや。余等陳て曰く。徒らに田畝を捨るなり。宜しく之を止るには如ざらんかと。父も亦諾す。然と雖。此念益絶ち難く。數年れ後余に謂て曰く。我此志を懷くや久 [illegible] と。余是に於て人を雇ひ。相與に草莽を擔ひ。草莱を闢き。山を作り水を引き。頃餘の庭をなす。父喜び甚し矣。山の最も高きを小雷山と名け。池の湛々たる處之を小玄洋と云ひ。水上に臨める亭をば晴雲樓と命ず。皆父の命じ玉ふ處なり。翌年病に臥し遂に黄泉の客となる。嗚呼今此假山水。水清く魚數ふべきは往日に異らざるも。之を愛するの主は今や卽ち亡し。百花れ妍を爭ひ月の盈虧をなす。亦皆徒らに舊情を帶たり。若し父の志を助けて。夙に此假山水を築かしめば。父の之を愛翫する年其久しうるべしと。思ふて此に至るもば憂情遣るに由なく。皇考の墓よ詣でぬ。五日朝早く余は歸熊を初めたり。千里悠々悲去國。一生碌々愧無功。橋頭垂柳催流涕。花外啼鶯引別情。と呻吟ふつゝ博多よ乙滊車に乘り。久留米松本君の宅に着きぬ君と余が舊友なればなり。令孃出て應接したり是君の令妹なり。孃は一滴の涙を浮めつゝ。先つ語るは兄れ事なりき。兄は長崎に遊び肺を病み家に歸乙。床にある中母を亡ひ。益落膽途に肉落ち頰露も。墓なき最期を逐たりと。其聲の綿々たる雨に鳴く鶯の如く。又切々さる風に咽ぶの蟬に似たり。余は覺へず涙衣を濕し。起て香資を靈前に供へ。謂らく。余が嘗て石門先生の門を敲くや。兄に攀緣したるなり。倩ら思ひ廻せば。昔なりけり六年の。前に相知る修文館裏。學而の編を繙ては。時習の樂を同し。生來初めて炊飯を務めては。君は爲めに汲水採薪の勞を助けたり。又大淵村遠き。日向神山谷を

穿ちつゝ。奇巖を賞めしは幾度ぞ。黑木驛外。流螢を愛でつゝ矢部河畔。東の空の曙るをも知らで暮せゑ交は。幽明を距だち夢とはなりにけり。嗟々。」

七日前七時松本氏を辭し瀨下水天宮に謁す。祠前に一大石碑あり。是岸良福岡縣令の撰する久留米絣の碑名なり。抑〻久留米絣は寛政十一二年の間井上傳子を嚆矢とす。傳子は十二三才の時。白糸の數所を括紮し。之を藍汁に浸し。後其紮糸を解き去り。一布を織る。布面白紋散亂頗る奇觀を呈す。是雪降或霰織の濫觴なり。爾來大塚大造に傳へ。天保十年赤間關妓に傳へ。以て今日の旺盛に至れりと云ふ。誰か之を稱賛せざらんや。祠は筑後川の清流に臨めり。玉瀧に倚りて眺れば。百足虫の如き鐵橋は北に横ぎれり。西肥の諸山之遙に聳たり。筏に乘りて流を下る人は一一數ふべし。祠の東側は男女大凡六十人許開拓せり。是神苑を擴張するなりと云ふ。此神苑成るの日と。紳士貴女其れ遊らん。神は明眸を開き笑を含みて見玉ふらん。靄然たる和氣と此廣野に溢れん。道を八軒屋に取り。國道に出で中廣川村に入りぬ。道の左右多く童山にして所々に青帶を纏へり。是他の草土を剝來りて被らせたるものにして。筑後川の渣滓を拒くの遠因に基くと云ふ。六年前之を作りて今日に至る迄。其帶の如き草の蔓延する事なく依然たると。又道の左方に温泉あるとより之を考れば。地學上彼火山大被裂の時の花崗石層ならんか。先生を訪ふ、余は此時初めて此旅行中に喜を生じたり。何ぞや。我恩師蒲池先生は少えも昔日と更に異なり玉ゑざればなり。授講淳々然として止み玉ゑざればなり。課し終て後は愛犬を率ひ散策を試み玉ふ依然たれ

はなり。先生の愛子なる余の舊益友なる意海君も亦依然たるばなり。是に於て過去と未來とを話し。又理談熟する所頭に膝を前め。吟思細なる時霧無き髭も撚りたり。

七日前九時意海君。有萬園學生と謀りて余を高良山に誘ふ。乃ち昔時熊襲が城きし城石れ斷續たるを見。突兀たる始原岩を蹈み。高良神社に謁す。風景絶佳なり。菜種の黄花に新麥の綠葉をこきまぜて。惜氣もなく蜀江の錦を眼下に布きたり。唯恨むらくは烟霞の遠地を隱せることを。

八日前七時蒲地先生に別を告げ船木屋温泉に赴く。此地や矢部川に臨み。水清く柳綠に。樓閣巍々河岸に列せり。頗る我意に適す連日の入浴を欲すれども。囊中錢おきを如何にせん。

臨水千絲好掬春。倚欄身見數魚身。若將一幅寫此景。我亦画中添興人。

の一絶を作り愛を殘し滊車に乘じて歸熊しぬ。此時午後十時を過ぎたり。嗚呼待ちに待ちたる体業と既に過ぎて。邊なく際なく始なき。過去の夢とはなしたりぬ。

文苑

偶成　　武藤彪

百花萬點滿枝頭。風雨無情却買愁。唯有一篇文字在。古今上下幾春秋。

送德永生之京

花開午將落。月滿亦還虧。雨至春時灑。人於別夜悲。一生莊子夢。百載少陵詩。匹馬明朝